
ただいま恋愛enjoy中!!

小野葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ただいま恋愛enjoy中!!

【Nコード】

N0420I

【作者名】

小野葉

【あらすじ】

『みにくいアヒルの子』からとったアダナの『アヒル』と呼ばれてイジメられていた少女、雛鳥巡は、その時に助けてくれたところの少年、雛鳥榛に恋をする。そして十年後……。初恋の相手、榛が巡の学校に転校してきて、巡的にはハッピーだったハズなのだが、彼は記憶喪失になっていた上に、性格まで180度変わっていて！？性悪王子×天然お姫様の純愛ラブ!!!!

第一章 ただいま恋愛enjō中!! (前書き)

とことん純愛です。

第一章 ただいま恋愛e n j o y中!!

11月の

寒い雪の降る中、

私の初恋は終わった。

大好きな人が、

他の女子と

キスしているのを

見てしまったから……。

第一章 ただいま恋愛e n j o y中!!

私が初恋の彼と初めて会ったのは、ショッキングが出来事が起きてしまった今現在から、十年程前にさかのぼる。

その日も雪が降っていました。

小学一年生だった私は、当時イジメられっ子でした。

運動がまるでダメだった私は、

『みにくいアヒルの子』からとった

『アヒル』

と呼ばれていました。毎日毎日が辛くて苦しくて、そんな地獄のよ
うな日々から救い出してくれたのが榛ちゃん

でした。

私のいとこの榛ちゃんは転校生として突然、私の小学校にやってきました。

「東京の小学校から来ました、雛鳥ひなどり 榛しんです。よろしく」

高い身長に、長い手足、そしてなにより、そのカッコイイ顔で、榛ちゃんは女子の注目の的でした。

一方の私は、人気のある榛ちゃんのこととして、更に女子からのイジメはヒートアップしていきました。

ある日、私がイジメられている現場に榛ちゃんがやってきました。

ああ、

榛ちゃんにまで

イジメられるんだな……。

そう思った私は、

何も聞きたくなくて心を閉ざしてしまいました。

けど、榛ちゃんの口から出た言葉は意外なものでした。

「何でオレのいとこイジメてんの？」

榛ちゃんが冷たい目で女子達を睨みます。

「だってコイツ、ブスでノロマなブタのくせに雛鳥様のいとこなん

だもの…」

女子達がもごごと口ごもると、榛ちゃんが
ドンッ！！

と思いつき机を叩きました。

「ふざけんなよ！オレのいとこだからって巡めぐるのことイジメンのか！
？そんなのおかしいだろ！！」

「な、なんでいとこだからってそんなに『アヒル』の事がばうのよ
？もしかして雛鳥様ったら、あんな『アヒル』の事が好きなの？？」

女子の一人が猛反撃。

しかし榛ちゃんはそんなものともせず問題発言。

「オレは巡が好きだな」

そんな榛ちゃんに対して、またもや女子が涙目で反論してきます。

「あ、あんな『アヒル』のどこが良いのよ！！！！！！」

「あんまり巡を『アヒル』って言うと、本気で怒るよ？それに巡は
『アヒル』じゃない。ただの雛鳥だ。名字の通り、巡はまだ、雛鳥
なんだよ。これから綺麗な白鳥へと進化して行くんだ。な、巡？」

そう言って彼は右手を私に差し出してきました。

「はい、手エ掴めよ」

バキユン！！！！

何かが

撃ち抜かれるような
音がしました。

それは、

私が産まれて初めて
恋に落ちた音でした。

それからしばらくして、私の初恋の人、榛ちゃんは東京に帰ってしまいました。

でも、私はずっとアナタの事を思い続けています。

今でも

アナタを……。

ピリリリリッ！！

大好きな初恋の人の甘い夢は、無情にもきっかりと朝7時に鳴る、けたたましい目覚まし時計の音によってガラガラと崩壊していきま

す。
甘い妄想の世界にまだ浸っていた私は、二度寝しようと布団に潜り込みます。

潜り込んでから、私はふと考えました。

今が7時。

登校締切時刻（遅刻の事を巡はそう呼んでいる）は8時。

学校に行く為の身だしなみで二十分。

お化粧で二十分。

歩く時間で四十分。

思いつきり二十分オーバーである。

「が、学校！！遅刻する遅刻！！！！！」

私は急いで着替えると家から飛び出た。

「あのね、巡……………」

「後にして、お母さん！！！」

私はろくにお母さんの話を聞かずに家をでた。

「学校」

「今日は創立記念日だった〜!!」

がつくりと肩を落として落ち込む。

「あの〜」

そんな私に誰かが話しかけてくる。
そこにいたのは……榛ちゃんそっくりの少年でした。

「榛、ちゃん？」

恐る恐る少年に聞いてみる私。

「はっ？」

やっぱり違う人だったみたいです。
そう思うと、急に顔が赤くなってくる。

そんな時に、一人の少女が榛ちゃんそっくりの少年に抱きついてきました。

金髪で、ガングロで、いかにもギャルですと言った感想を受ける感じの子です。こ、こんな感じの子を彼女にする人を榛ちゃんと間違っってしまうなんて……。

ごめんね、榛ちゃん。

ごめんねえー！！

私は急に恥ずかしくなってその場からダッシュで逃げました。

「おい、待てって！！」

と制止する少年の言葉を聞かずに。

次の日

く学校く

「転校生を紹介する。入ってこい」

朝のホームルーム中に、いきなりの転校生紹介。

そして入って来たのは……。なんと、榛ちゃん似の昨日の彼でした！！

あの子、なんていう名前なんだろう？

榛ちゃん似ということもあって、彼の自己紹介をとて楽しみにしていた私。

けど、彼の自己紹介は意外なものでした。

「初めまして。東京の高校から来た、雛鳥 榛」

ボソッと呟くように彼……榛ちゃんは言った。

榛ちゃんごめん!!

昨日に引き続き、榛ちゃんを間違えるとは!!

私は嬉しさのあまり、ホームルーム中だということも忘れて席から立ち上がりました。

「榛ちゃん!!!!!!」

続く

第一章 ただいま恋愛e n j o y中!! (後書き)

今回は、巡が榛に猛アタック????

榛の衝撃の事実を知ります。

よければ、次回もまたよろしく願いします!!

第二章 絶望（前書き）

次回の投稿は、0：00～1：00を予定しています。
もし作者の都合により、作品が遅れる場合はスイマセン。

第二章 絶望

第二章 絶望

「榛ちゃん!!」

普段の大人しい私の言葉に、みんながザワザワと騒ぎ立てる。

「なんなのかな、雛鳥さん」

「ちょっとカッコイイ子が入ったからって、ねえ？」

「てか、知り合いなのかな??」

「静かにしてください!!」

担任の水沢先生みずさわが一喝すると、一気に周りが大人しくなる。

「雛鳥さんも、座りなさい」

「でも、先生!!私、榛ちゃんのいところなんです!!」

「え...?」

私の言葉に先生は、

「初耳だわ…」

と呟く。

「雛鳥さん、アナタ、本当に雛鳥くんのいとこなの？」

どうして先生はそんな事聞くの？

担任なんだから、生徒の情報は知ってるハズなのに…。

「はい…そうですね…」

「おかしいわねえ…」

首を可愛いらしく傾げる水沢先生。

今年で40歳とは思えないほど可愛いなあ、水沢先生。

でも首を傾げたせいで知的な眼鏡がずり落ちそうになってるし…。

「ねえ、雛鳥さん。何かの間違いじゃなくて?？」

「えっ? 違いますよう、先生。私と榛ちゃんは、間違いなくい
とこです! ねえ、榛ちゃん?」

私は榛ちゃんに同意を求める。

「は、お前といとこ？初耳だな。人違いなんじゃねーの」

えっ…？

し…ん……ちゃ、ん？

わっ、私の聞き間違いだよな？それとも、あまりにも私が変わっちゃったから気づかないのかな？
きつとそつだよな…。

「い、いやだなあ、榛ちゃん。巡だよ、巡。雛鳥 巡」

そつだよ、私だよ。

榛ちゃん…。

思いだした、よね？

「っーか、アンタ誰？妙に馴れ馴れしいんだけど」

アンタ、ダレ？

ダレ、ッテ…？

ワタシダヨ、シンチャン…。

ウソダヨネ？

ワルイ、ジョウダングダヨネ？

「もう、榛ちゃんつたら、見ない間に冗談上手くなっちゃってー

「！」

「いや、マジで覚えてないんだけど」

その瞬間、

私の世界は

真っ白に

なりました。

バシン

気づけば、

乾いたような音が響いていて、

私は、

私は――。

私は榛ちゃんの頬を

叩いていたのでした――。

いつの間にか私は学校を飛び出して、昔に榛ちゃん一家が住んでい

た家の前に来ていました。

どうして、私…。

ここに来たんだろう…。自分でも分からなかった。

ただ、榛ちゃんに、

「さっきのはウソだよ。巡の事、忘れる訳ねーじゃん」
って言って、昔みたいにイタズラっぽく笑って欲しかった。

私は震える手を押さえて、チャイムを押しました。

中から人の声がしたので、もしかしたら誰かいるのかな？って思ったから。

ピンポン♪

チャイムの軽快な音が響いて、中から小太りの女性が出てきました。

「はい？…あれ？…もしかして巡ちゃん？」

小太りの女性…：榛ちゃんのお母さんは、十年経ってるから、ある程度は老けたけど、昔と同じ温かい笑顔で私を出迎えてくれた。

「…はい、おばさん…！」

「何があつたか知らないけど、泣いてる娘さんを帰す訳にはいかな
いね。上がっていきなさい、巡ちゃん」

泣いてる？

私が？？

私は目元を、そっと指先で触れてみる。
濡れた感触。

自分でも気づかないうちに、泣いてしまってたみたいだ。
でも私には、もう恥ずかしいとか感じる余裕すらなくて、
榛ちゃんのお母さんに抱きついた。

「榛ちゃんのお母さん……！！！！！！！！」

「なあに、巡ちゃん」

榛ちゃんのお母さんは泣いてる私の頭を優しく撫でてくれた。

「榛ちゃんが……榛ちゃんがっ……！！」

「榛がどうかしたの？」

「榛ちゃんが、私の事、誰って……言ったの……！！巡だよ、雛鳥
巡だよ、って言っても知らないって……！！」

「!?!」

榛ちゃんの顔が段々青ざめてくる。

どうかしたのかな？

私に呆れちゃったのかな…？

「巡ちゃん…」

「な、に…？榛ちゃんのお母さん…」

「今から大事な話を話すわよ？落ち着いて聞いてね??」

「うん…」

何だか嫌な予感がした。

背中に、

ゾクゾクツとした

悪寒が走る。

「榛ねえ、巡ちゃんと別れてからすぐ、交通事故にあったのよ」

「え…？」

榛ちゃんが、交通事故!？

「ケ、ケガはっ!!」

「だから、落ち着いて聞いてね？ 榛は、道路に飛び出した子犬を助けようとして、車にひかれちゃったのよ。奇跡的に特に目立った外傷もなかったんだけど、頭を強く打っちゃったのよ。その後、一時的な記憶喪失になってたんだけど、ちゃんと思いだしたの。だから巡ちゃんの場合もそれじゃないかしら？」

記憶…喪失？

榛ちゃんの中から私だけが消えたの？

そんなの…イヤだよ。

榛ちゃん…。

「巡ちゃん？」

「…榛ちゃんのお母さん、私、帰ります」

頭の中がボウツとする。

「巡ちゃん危ないっ!!」

危機迫ったような顔した榛ちゃんのお母さんが私に叫ぶ。

危ない？

何が…。

私はフワッと
横を見る。

すると、トラックがこっちに走って来るのが見えた。

もう、

どうでもいいよ…。

榛ちゃんの中から私は居なくなっちゃったんだから…。

「巡ちゃん!!」

続く

第二章 絶望（後書き）

次回は…。

秘密です。

楽しみにしていてください。

第三章 私の十年間（前書き）

23日の0：10から、お喋り広場さんのチャットコーナーで、意見交換・交流会をします！！
読者さんも、作者さんも、一緒にお話しましょう！！

第三章 私の十年間

「巡ちゃん!!」

榛ちゃんのお母さんの叫び声が聞こえた次の瞬間、車に跳ねられたかのような激しい衝撃が私を襲った。

え？

何？

何が起きたの…？

「ふざけんなよ！お前、どこ見てんだよ!？」

そう怒鳴った、私の前に立っていた人物は……。

「榛ちゃん!!!!!!」

「バカ野郎！いくらオレに忘れたからって自殺しようとするバカがいるかよ!!!!!!」

榛ちゃんの顔

…怖い。

今までにないくらい、

怒って…る？

「ごめんなさい……、榛ちゃん、ごめんなさい……」

私は膝を抱え込んで泣いた。

こんなに泣いたのは、

小学校の時、十年前以来だった、

「全く…アンタ、オレのなんなんだ…うわぁあ！！！！？」

榛ちゃんのいきなりの奇声に驚いた私は、伏せた顔を上げる。

すると、榛ちゃんを羽交い締めに行っている、榛ちゃんのお母さんの姿が見えた。

「オレのなんなんだって、巡ちゃんはアンタの初恋の人でしょーが！！それをアンタは……簡単に忘れやがってええエ！！」

うわ、痛そう……。

骨がゴキゴキいつてるよ！？

止めてえ、

それ以上やったら榛ちゃんが壊れちゃう！！！！

「榛ちゃんのお母さん！榛ちゃんが壊れちゃいますよ！？」

「大丈夫、そんなヤワに育てた覚えはないから」

榛ちゃんのお母さんが更に腕の締めをきつくする。

「いでえ！！それで、も、人の母親があゝ！！！！！！！！」

榛ちゃんが何とか、榛ちゃんのお母さんの拘束から逃れる。

おお！！

さすが榛ちゃん！

あの拘束から逃れるなんて！！！！

「つか、マジでなんなんだよ、アンタ。オレの初恋？ふざけんな！！！！オレの初恋は中学で、お前じゃない子にしたわああ！！！！」

「そう、なんだ……」

そうなんだ…、

榛ちゃん、

別に好きな子居たんだ…。

「それと、アンタ真面目にオレのいところなのか？」

「うん、そうだよ。私と榛ちゃんはいとこだよ」

「うああああ！！なんだよ、その『榛ちゃん』って！…マジでキモいんだけど」

違う、

そんな事ない。

榛ちゃんって呼び方の何が悪いの？

私は十年間、

榛ちゃんを

『榛ちゃん』

って呼んできたの。

やめて。

私を拒否しないで。

私を…私の、アナタを思った十年間を。

「そんな事ない！！気持ち悪くなんかないもん！！私のアナタへの
思いを粉碎した次は、私がアナタを思った十年間まで壊す気！？止
めて！！私を拒否しないで！！！！」

私はそう叫んだ。

今までにないくらい大きな声で。

「アハハハハハッ！！！！」

急に大きな笑い声が響く。

榛ちゃんのお母さんの声だ。

「やっぱり、将来の榛の嫁は巡ちゃん決定だね！」

うう、榛ちゃんのお母さん！！

応援ありがとうございます！！！！

「榛ちゃんのお母さん、私、決めました！！！！榛ちゃんが私を思
い出すまで、私、榛ちゃんを離しません！今日から、榛ちゃん家に
住み込みしても良いですか？」

グッチョブ!!と指で表してから、私の肩を叩く榛ちゃんのお母さん。

「頑張んな。住み込みは、私が許す。丁度空いてる部屋、あるしね」

「ありがとうございます!榛ちゃんのお母さん!!...いえ、お母様
!!!!!!」

ハッハッハッハッハッハッ!!!!!!

と、またもや高らかに笑うお母様。

「ちょ、ま、オレの意見は!?!」

顔を青ざめた榛ちゃんがお母様に聞く。

そんなに

私が嫌いなのかな?

「聞かない。悔しかったら、1日でも早く巡ちゃんの事、思いだしな」

「……分かった」

苦々しい表情の榛ちゃん。

さて、

明日からは

榛ちゃんとの同居♪

楽しみだな♪♪

第四章 同居（前書き）

次回から、投稿する日を一定にしたいと思います。なので来週からは、毎週木曜日の9時〜12時の間に投稿させていただきます。

第四章 同居

くその日の夜く

「お母様く、巡です！！荷物を持ってきました。今日からよろしく
お願いします！！」

私は榛ちゃんの家に入り、温かく出迎えてくれた（榛ちゃん以外。
歓迎してくれたっていいのに！！）お母様達に挨拶をする。

「雛鳥 巡です。今日からお世話になります！！」

これからよろしくお願いします、という意味を込めて、私はお母様
達に深く深くお辞儀した。

「ハッハッハッ、巡ちゃんみたいな良い子は大歓迎さ」

「ありがとうございます」

お父様、ありがとうございます！！
心の底から感謝してます！！

あれ…？

何か足りない…。

お母様、お父様、榛ちゃん……。

あっ！！！！

「そう言えば、^{かと}樺斗お姉様と^{ほうす}鳳珠お兄様はどうしたんですか？」

「ん？あゝ、樺斗は女子バスケット部の合宿で、鳳珠は部屋で寝てるよ。本当に巡ちゃんはよく気がつくね」

「そんなコトはないですよ、お父様」

ついさつきまで、榛ちゃんしか見ていなくて、樺斗お姉様と鳳珠お兄様の存在をすっかり忘れていたなんて…絶対に言えません…。

ふふふふ、なんて笑いながらお父様とお母様とお話しをしていると、段々と榛ちゃんの顔が不機嫌になっていきました。
わっ、私、なんか不味いこと言っただけかな！？

「あのさあ、んな所で何時までもくっちゃべってないでさっさと中入れば？」

冷たい…。

榛ちゃんがとてつもなく冷たいです。

私、榛ちゃんに嫌われちゃったのでしょうか？
それだけはイヤです。

「あの、榛ちゃ……」

「んな所に何時までもいっと、風邪ひくぞ」

……。

榛ちゃん!!

!!

私の…私の体を思っ言ってくれたんだね??

嬉しいよう!!!!!!

やっぱり私が好きな人は榛ちゃんだよ!

カッコ良すぎるよう!!!!!!

「だからさっさと中、入れよな」

榛ちゃんはそれだけ言っと、さっさとリビングの方へと行ってしまいました。

「そうね。巡ちゃん、中に入んなさい」

「は、はい!!!!!!」

お母様の後を追ってリビングに入ると、そこは……。
そこは……。

ゴミの山でした……。

「あの、お母様、ここは……」

「リビングよ」

即答するお母様。

「ですよ〜」

すいません、此処は、本当に人間の生活する空間でしょうか？

「ごめんなさいね、巡ちゃん。ちょっとばかり散らかってて」

すいません、本当にすいません。

ここ、人間の生活する空間じゃないです。

「お母様、晩御飯はいつ頃になるんですか？」

「夕飯？そだねえ、8時頃かしら」

私は黙って腕時計を見る。

今は6時。

うん、大丈夫だ。

「すいません、お母様…。片付け…させて下さい！！！！！」

ごめんなさい！！

でも、潔癖症歴十六年の巡は、巡は……。

この部屋は耐えられません！！

テキパキと片付けていく私を、ポカンと見つめるお母様とお父様と榛ちゃん。

驚いてはいるものの、邪魔を私を止める気はないみたい。

～一時間後～

「おつ、終わった…」

終わりました…。

これぞ人間の住める空間です…。

私がピカピカになって、ゴミ一つない空間を見回してフー、とため息をつく、いきなりお母様が笑いました。

「いやー、こんなにキレイになったの何年ぶりかなあ」

何年ぶり？

ちょっと待って下さい、お母様。

「お母様、たしか、榛ちゃんってキレイ好きじゃありませんでしたか？」

そう、榛ちゃんは確か私以上の潔癖症。

こんな空間（かなり失礼）に住めるハズ…。

「んー？昔はそうだったんだけど、記憶喪失後から、変わっちゃってねー」

また、

記憶喪失。

まるで違う人みたいな榛ちゃん。

私の知らない榛ちゃん。

昔の榛ちゃんをいくら思い浮かべても、
今の榛ちゃんにはちっとも当てはまらない。

どんな人にも優しい性格は、一部の人だけ。

潔癖症は、全然平気になる。

そして私の印象は……きっと、初恋の人から、ただの迷惑な人。

もう、

私の知ってる

…私の大好きな榛ちゃんは居ないのだろうか？

とか思ってしまう。

ブンブンと私は頭を振る。

それでもしないと、不安に飲み込まれてしまいそうだから。

「さ、巡ちゃん。夕ご飯を作るから、手伝って」

お母様が私の背中をポンと叩き、リビングのすぐ近くにある台所へと連れて行ってくれる。

そんなお母様の優しさに、フワッと顔が緩む。

そんな私を見て、榛ちゃんがボソッと呟く。

「…気色ワル……」

ガーン

榛ちゃんに、

榛ちゃんに、

気色悪いって言われた……。

気色悪いって…。

昔の榛ちゃんなら、

絶対にそんな事言ったりしなかったのに。

酷いよ、

榛ちゃん…。

ポロポロと目から涙が洪水のように溢れ出した。

私はそれを抑えるように両目を手で覆って、地面にしゃがみこんだ。

「榛！何てこと言うのー!!」

「だってさ、いきなり笑いだすなんて気色悪い以外の言葉が見つからない」

「なー!!……巡ちゃん、部屋に案内してあげるわ。ご飯は後で持つ

ていつてあげるから、今日は部屋で食べなさい」

お母様が私に優しく笑いかけてくれる。

榛ちゃんとは大違いだ。

「榛！！！！！アンタ後で覚悟しなさいよ！！」

お母様は榛ちゃんを思いつきり怒鳴りつけると、リビングを出て、玄関のすぐ横にある階段を上る。

私はお母様に遅れないように自分の荷物を持つと、お母様の後を追いかけて行った。

二階に着くと、そこには左側に部屋が4つあった。

そして右側には天窓と、サボテン等の植物が棚に置かれていた。

「一応説明しておくわね。榛の部屋が一番奥。巡ちゃんが、その隣の部屋」

そう言ってお母様が私の為に用意してくださった部屋に入っていく。部屋の壁紙は白で、カーテンは黒。モノクロのシックな部屋だった。

「ごめんね、本当はもっと女の子っぽい感じにしたかったんだけど……」

「いいえ、素敵です！私、こういう部屋、好きです！！」

「そう？それと、荷物はここに置いておくわね」

お母様が白のシングルベッドの上に私の荷物を置く。

「あと、巡ちゃんの左隣は鳳珠の部屋。

一番階段から手前にあったのが樺斗の部屋だからね」

「はい」

お母様は部屋を出て行くこととして、ふと足を止める。

「巡ちゃん、お願いがあるの」

「何ですか？」

「榛、あんな風になっちゃったでしょ？私達はもちろん巡ちゃんを応援してるわよ？でも……」

「でも？」

「もし、榛に別に好きな人ができたら、恨まないであげてほしいの。そして、榛を応援してあげてほしい」

お母様は優しく言った。

でも今度の言葉には私は微笑む事が出来なかった。

私は、部屋を出て行くお母様の背中に途切れ途切れに返事をした。

「は……、い……」

考えてみたこともなかった。

榛ちゃんが私以外の人と付き合うなんて考えたくなかった。

ふと頭に、

榛ちゃんと学校の前で会った時の事を思いだした。

ギャル風の女の子。

ああいう子が好きなのだろうか？

じゃあ、

私の事はどう思ってる？

榛ちゃん、

榛ちゃん、

榛ちゃん、

榛ちゃん……。

私は黒いクッションに顔を埋めると、思いきり声を出さずに泣いた。
……。

続く

第四章 同居（後書き）

次回は、泣いている巡に近づく黒い影。
一体この人は誰なの！？

第六章 風邪

「次の日の朝」

何だかスゴく体が重い…。

やっぱり昨日、たくさん泣いたからかな…。

そんな事を考えていると、昨日のお母様との話がフラッシュバックしてくる。

『榛に他に好きな子ができたら、応援してあげてね、巡ちゃん』

榛ちゃんに私を思い出してもらおう事しか頭になかった私は、榛ちゃんに他な好きな子ができるトコなんて想像してなかったから。

「私も…ギャルっぽくなるのかなあ…」

一人でポツンと呟く私。

榛ちゃんが…

榛ちゃんがギャルを好きなら私…

私、雛鳥 巡は、ギャルにだってなんにだってなってます！！

私は拳を、グツと宙に突き出した。

そうと決まったら、今日は学校帰りにデパートに寄ろう。

そつ心に決めた私は、モノクロのシックなパジャマから制服に着替

えてリビングに降りて行く。

「お父様、お母様、おはようございます」

リビングの扉を開けると同時に私は頭を下げる。

そんな私が見たのは、鳳珠お兄様ただ一人。

リビングには鳳珠お兄様しか居なかったのである。

「鳳珠お兄様、お母様とお父様と榛ちゃんはどうなさったんですか？」

朝ご飯のバタートーストを右手に持ったまま、ポカンとした表情で固まっている鳳珠お兄様。

「鳳珠お兄様？」

「な、ななな、なんで巡が此処に居るの!？」

はい？

「私は昨日の夜からお邪魔していましたが…」

「うつそ!!!」

テーブルにパンツと手を着き、驚きのあまり立ち上がる鳳珠お兄様。
あっ、そうか…。

鳳珠お兄様は昨日、部屋で寝てたから知らないんですね……。

「昨日よりお世話になっております、雛鳥 巡です。よろしく願
いします」

「ふーっ。そっかあ、よろしくね、巡」

「はい、よろしく願います」

「いえいえ、こちらこそ」

ぺこり、と頭を下げ合う私達。

「ところで榛ちゃんはどくなさったのですか？」

「榛は部屋に居るよー。熱出したとかでー…」

私は、鳳珠お兄様の話を最後まで聞かずにリビングを飛び出し、榛
ちゃんの部屋へ向かった。

「榛ちゃん!!!!!!」

第七章 看病（前書き）

かなり間が空いてしまつて、すみませんでした……。。

第七章 看病

「榛ちゃん!!」

そこには顔を真っ赤にして寝ている榛ちゃんと、お父様とお母様がいた。

「ああ、おはよう巡ちゃん」

相変わらずの、ノンビリとした口調で話すお母様。

「し、榛ちゃんは大丈夫なのでしょうか!？」

「お願いします!!
大丈夫であってほしい…。」

「いや?全然」

「スーツを着たお父様がにこやかに話す。
全然って……。」

「全然ってどういうことなんですか!?!榛ちゃんは死んじゃうんで

すか！？死んじゃうんですか！！！！！？」

完璧にテンパる私にパジャマ姿の榛ちゃんが一言。

「勝手に殺すなよ……」

あ……しまった……。

「……………テヘツ？」

私は軽く頭をポンツと叩き、可愛らしく舌を出してみる。

「ハッハッハッ。相変わらず可愛いなあ、巡ちゃんは」
とお父様。

「本当に可愛いわ」

と、お母様。

せ、成功？

なんとかごまかせた??

「ごまかすなよ……」

呆れ顔の榛ちゃんがボソツと呟く。
…やっぱりダメだったか……。

「うーん、今日は私、仕事休めないのよねえ」

「僕もなんだよ…」

お互いの顔を見つめあいながら、榛ちゃんについて相談する2人。

「ねえ、巡ちゃん。今日、榛の面倒を見ていてくれないかな？」

「巡ちゃんなら安心できるし」

え〜っ！！！！！？？

わ、わわ、私が榛ちゃんのお世話を！？

「嫌かい？」

心配そうに聞いてくるお父様。

お父様……心配しなくても、私の答えなんか決まってます！！

「そうだよな、嫌だよな、うん。いや〜、お前にもまともな部分が少しでもあつて良かった！……！ほらさっさと学校行け……」榛ちゃんの為なら……！「おい……！！！」

キャー！！！！！！

一日中榛ちゃんの看病！！！！

ここで私のスキルを見せつけて、思い出させるの！！

「お父様、お母様、ぜひやらせて下さい！！！！！！」

私は目をキラキラさせながら、お父様とお母様の手を握る。

「うん！！じゃあ巡ちゃん、頼んだよ」

「はい！！！！！！」

私の返事を聞いて安心したのか、2人共榛ちゃんの部屋を出て行く。
やったー！！と内心ガッツポーズをする私に、榛ちゃんが呆れた顔をする。

「お前さ、バカじゃないの？オレなんかに構ってないでさっさと学校に行けば？」

「そんなことはしません。絶対にしません！！」

「いや、だから……」

「好きな人が体調不良とあらば、甲斐甲斐しく看病！！当たりの常識です！！！！」

「…………常識なのか？」

「はい、常識です！！！！」

更に呆れた、というようにため息をつく榛ちゃん。
その顔は心なしに赤いみたい。
…………熱があるからかな？

「榛ちゃん、動かないでね？」

「おい、ちよつ…………！！」

制止する榛ちゃんの声を無視して、私は榛ちゃんのおでこ自分の
おでこを重ねる。
林檎みたいに真っ赤になる榛ちゃん。
…………可愛い。

「うーん…………熱は大体8度くらいですね」

大体の体温を予想すると、榛ちゃんのおでこから自分のおでこを離す。

…………本当はもうちよつとくつつけておきたかったけど。

「榛ちゃん、朝ご飯は食べました？」

多分朝ご飯を食べてないであろう榛ちゃんに聞くと、やっぱり予想通りの返事が返ってきます。

「食べてない」

「じゃあ何か作ってくるね」

私は榛ちゃんの身体に布団をかけ直すと、静かに部屋を出た。

手料理

榛ちゃんは何が好きなのかな？

和食？

洋食？

中華？

そんな事を考えながら、私は料理を進めます。

今日の朝ご飯は、日本人の基本、味噌汁ときんぴらごぼう！！

あと、鮭の切り身も焼かなくっちゃ。

ハア……………榛ちゃんの為に料理するなんて幸せ……………。

何か、新婚さんみたい…………。

そんな突拍子もない事を考えては赤面する私。

そんなこんなで、15分後には、とても健康的な朝食を作りあげました。

榛ちゃんは喜んでくれるかな…………？

私はお盆に料理を載つけると、料理を二階に運ぼうとしました。

すると、いきなり誰かの長い腕は伸びてきて、お盆をスッと持ち上げました。

「思いだろ？それ、持ってやるよ」

そう言ってお盆を持ち上げたのは、他でもない榛ちゃんのお兄様の鳳珠様でした。

「ありがとうございます」

感謝の意を込めて笑顔笑顔。

やっぱり鳳珠お兄様は優しいなあ。

さすが榛ちゃんのお兄様！！

うわ！！

しまった！！

つい口元が緩んじやった……。

鳳珠お兄様にその姿を見られてないかと顔を上げると、顔を真っ赤にした鳳珠お兄様が立っていた。

………笑うのを堪えなきゃいけないほどに醜い顔を見せていたのかな？

マ………マイナスイメージを与えてしまった！！

真っ赤な顔をしたまま、階段を駆け上がって行く鳳珠お兄様。
……やっぱマイナスイメージだ。

「はぁ……………」

ため息をつきながら、鳳珠お兄様の後を追いかける私。

「榛ちゃん、入りますよ？」

ドアを軽くノックして部屋に入る鳳珠お兄様と私。

榛ちゃんはまだ顔を赤くしてベッドに横になっていた。

「榛ちゃん、朝ご飯作りました。今日はひとまずお粥です。おかずはきんぴらごぼつと味噌汁。……………これで良かったですか？」

「ん……………センキュ」

ゆっくりと体を起こす榛ちゃん。

し、榛ちゃんにセンキュって、センキュって言うてもらえた……！

つつい顔を赤くする私。

そんな私に榛ちゃんが一言。

「口元が緩んでる。みつともない」

ハッ！！

つつい嬉しくて顔が！！

榛ちゃんに嫌われちゃう！！

自分の顔に手をやり、慌てる私。

そんな私の代わりに、朝ご飯がのっているお盆を榛ちゃんに渡して
くれる鳳珠お兄様。

榛ちゃんがそのお盆を受け取り、お粥をゆっくりと蓮華で口へと運ぶ。

「おいしいですか？」

お、美味しいといいんだけど……………。

「ああ、旨いよ」

ニッコリと笑った榛ちゃん。

うわっ……………カッコよすぎて卒倒しそうです……………。

しばらくは榛ちゃんが食べてるのをジッと見ていた鳳珠お兄様が、

ポツリと呟く。

「オレも腹減ったな……………」

こゝこれはチャンスです!!

これで私の手料理を振る舞えば、もしかしたらさっきのはチャラになるかもしれません!!

「私、料理作ります!!」

私がそう言つと、キラキラと目を輝かせる鳳珠お兄様。

「マジで!? 巡ちゃん“オレの為に”料理作ってくれんの?」

「はい」

スマイル。

笑顔は人間の印象アップの基本です。

「じゃあ、今から作ってきますね!!」

台所に下りて、先ほどのきんぴらごぼうを温める私。

あとは味噌汁と……………玉子焼きでいいかな。
味噌汁を温めて、玉子焼きを作り始める私。

あっ！！

そうだ！！！！

リンゴも切ってあげよう！！

私は包丁を手に取ると、きれいにウサギさんの形に切っていく。
それを真っ白なお皿にのせると、お皿にのせて、他の料理も違うお
皿に盛り付け始める。

「よっし！！できた！！！！」

私は料理を置いたお盆を持つと、階段を登って榛ちゃんの部屋に入
っていく。

「鳳珠お兄様。料理が出来ましたよ。食べてみてください！！」

「うん」

ニッコリと笑ってありがとう、と言つと、料理を食べ始める鳳珠お
兄様。

………　　そういえば榛ちゃん！！！！

私が榛ちゃんの部屋に行くと、榛ちゃんは布団をきちんとかけてぐっすりと眠っていた。

私は榛ちゃんのその寝顔を見つめていた。

そのうちに、段々と意識が遠のいていくのを感じた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0420i/>

ただいま恋愛enjoy中!!

2010年10月9日23時56分発行